なるほど！うみはく

鳥羽の名産物「ボラ」をつかまえた漁具

市立海の博物館 ☎㉜6006

vol.5

オボコ、スバシリ、イナ、ボラ、トド、と大きくなるにつれて呼び名が変わるボラは、出世魚として親しまれる魚で、オボコイ、スバシッコイ、イナセ、トドノツマリなどの言葉は成長するボラの呼び名と関わっています。

出世するめでたい魚として「名吉（なよし、みょうきち）」、伊勢地方で多く捕れ、コイに形や味が似ていることから「伊勢鯉」などとも呼ばれ、「毛吹草」※1（1645年）の諸国の名産物には「志摩国鳥羽鰡」、また「本朝食鑑」※2（1697年）には「伊勢の鳥羽、桑名の海浜で多く採れ、その美いものは他のどの国のものも及ばず、全く泥身がないという」とあり、江戸時代から鳥羽の名産物として知られていました。

江戸時代には、鳥羽、桃取、坂手、小浜、安楽島、浦村などの漁村で、群れで回遊してくるボラを山上につくったアラミ（魚見）小屋で待って見張り、群れを見つければ村人総出でタテキリ網を使ってボラの群れを取り囲み、サシアミに絡めたり、ヒシで突いたりして捕獲する大規模なボラタテ漁が行われていました。

小浜の寺・済渡院の境内には水族の供養のために立てた「南無阿弥陀仏鯉鰡鱒水族之碑」などと刻まれた3基の碑が建っており「明治12年50万余、明治22年100余万」「明治30年12月に浜辺浦で14万3410本、池の浦で29万1939本」の大漁があったことを伝えています。

昭和初期の池の浦でのボラタテ漁

昭和30年代後半に入ると伊勢湾の汚染が進んできてボラが「臭い魚」の代表として嫌われ、売れなくなり、鳥羽地方のボラタテ漁は、昭和45年の浦村の漁を最後に消えていきました。

海の博物館には、ボラ漁に使ってきた安楽島のタテキリ船（網船）2隻、浦村のトッペ（網船）などの漁船や、鳥羽、小浜、安楽島、浦村などで使われていた「文久、明治、大正、昭和」の年号や「大漁満足」などと記された「ボラサシアミ」、「ヒシ（3本、4本、5本など各種）」などの鳥羽の名産物「ボラ」をつかまえていた漁具類が大切に保存されています。

※1「毛吹草」江戸時代初期の俳句の書

※2「本朝食鑑」江戸時代中期の本草書

安楽島のタテキリ船

人権文化の花を咲かせよう

教育委員会生涯学習課 ☎㉕1268

Vol.176

「ガマン」

昨年大ブレークしたスポーツ選手に大坂なおみさんがいます。テニスの四大大会の女子シングルスで日本人初の優勝を飾り、彼女の発言は「なおみ節」と称されマスコミをにぎわしました。

彼女は、その勝因に「ガマンした」という言葉をあげました。スポーツに我慢はつきものです。しかし大坂選手の使うガマンは、日本人の使う我慢とは少し違ったように思うのです。

英語の「Patient」、この日本語訳をガマンといいますが、辛抱強くラリーを続けた大坂なおみ選手のプレーにガマンのプレーを見たように思うのです。サーシャバインコーチは、彼女にポジティブに物事を捉えることを教え、辛抱強く勝機をうかがうように指導したのです。

バドミントン選手で、無期限大会出場停止処分を受けていた桃田賢斗選手が、日本チームのエースとして復活を遂げました。挫折を経験する中で自分自身を振り返り、敗者になっても次の試合につながる冷静な弁が述べられるなど成長の姿を見て取ることができました。ガマンは耐えることだけを意味しているのではないのです。耐える時期があって、次への飛躍があるのです。

一方でスポーツ界のパワハラが次から次へと話題に上りました。スポーツに対する考え方、練習や指導方法も大きく変化しています。パワハラかどうかは、当事者が意識できないこともあります。「昔はこうだった」で語ることのできない問題です。時代の移り変わりの中で、間違っていることは正さなければなりません。当事者だけでなく、周りの人々が気付き、気付かせることが大切だと思うのです。

住みよい社会を作るためにネガティブに「我慢する」のではなく、ポジティブに「ガマンする」粘り強く生きる社会を作り上げたいものです。